

『公益』資本主義（原丈人さん）に共鳴！

かねがね、現在の資本主義の行き着く先は、何処なのか？

マネーがマネーを生む、金融資本主義が正しいシステムなのか？

英米型資本主義の終焉は近いのではないかと、考えていました。

原丈人さんが『公益』資本主義という新書版を文春新書から出版されました。原丈人さんは、内閣府参与であり、米国流ビジネスの先端にもおられた方です。

その著書の中で「株主資本主義は、マネー自体が商品になり、マネーがマネーを生む仕組みづくりで勝負する投機的金融が主流となり、まさにギャンブルと同じ、文字通りのゼロサムゲームになっている」と指摘されています。

たとえば、「ROE（自己資本利益率）は、会社の資産を大きくするのが経営陣の務めであるはずが、ROEの上昇のために、会社の資本を圧縮している。本末転倒の経営になっている」とも指摘されています。

我が意を得たり！と膝を叩きました。

そもそも、会社はだれのものか？

間違いなく一番は、そこに働く従業員のもののはずです。もちろん、支持して下さるお客様や、取引して下さる方々、地域社会、そして株主あつてのものですが。

100年企業は、そこに働く従業員が、安心して人生を懸けるからこそ実現するのです。愛社精神や社長への全幅の信頼、また仕事を通じての自己成長があるから、目の前の仕事に全力投球できるのです。

あるいは、長期的な研究を可能にするにも、内部留保が必要で、技術者を育てる環境が必要です。J A東海の、リニアモーターカーは、60年に及ぶ壮大なプロジェクトでした。一年や三年という、短期的な利益を優先する英米型の資本主義には、到底相いれないものです。

近江商人が、江戸時代から守り続けた“三方良し”の精神は、英米のWIN&WINという、私と貴方の双方に有利という、いわば“二方良し”を超えて社会的にも良い事が条件になっています。

モノづくりやサービスが基本にないと健全な資本主義ではありません。

本物が、正當に評価されないと伝統や技術は承継されません。

要するに、文化・歴史・伝統・精神が活かされないと、これからの資本主義は健全に発展し、人々を幸せにはしないのです。

幸い、我々日本人が大切にしてきたもの、守り抜いてきたものが、英米の資本主義の限界を乗り越えるモデルになるのです。灯台下暗しとは、このことです。

さあ社長、誇りと自信を持って、自社の発展に全力を捧げて参りましょう。



今月のポイント

グローバリズムから日本型経営へ